

小池・岸田・小川先生を送る

経済学部長 石 井 伸 男

この3月末をもって、小池重喜先生、岸田孝弥先生、小川雅敏先生が、本学経済学部を定年退職なされます。御三人の先生方を記念する『退職記念号』の発刊にあたり、経済学部長として先生方の永年の貢献を讃え、送る言葉をのべさせていただきます。

小池重喜先生は、山口県に出生され、1961年東京大学教養学部に入學、経済学部に進まれ、卒業後同大学院修士課程終了、博士課程を満期退學されました。小池先生は経済学部時代に、西洋経済史とマックス・ウェーバー研究で著名な大塚久雄教授のゼミに所属して勉強されたと伝え聞いております。小池先生の経済史・産業史への関心は若い時代から一貫したものだだったことが伺えます。

小池先生は、1974年10月に本学に助手、附属産業研究所専任所員として就任され、講師、助教授を経て87年に教授に昇任されました。その後1996年4月、産業研究所が専任所員制を廃止した機構改革にともない経済学部経営学科に移られ、日本経営史、産業史と演習をご担当になってこられました。また学内役職として経営学科長、そして2度にわたり経済学会長を務めてこられました。本学において32年半の長きにわたり、教育と研究に携わってこられたわけで、そのご苦勞は感謝に尽くせません。

小池先生は、まことに「学者一筋」とよぶにふさわしい方と申せましょう。研究面での先生のご業績は、群馬県電力産業史、県内戦時期労働問題・組合製糸問題にかんする分野、日本造船史にかんする分野、その他近代以降の日本の産業史・経営史の広範な分野にわたります。しかし、なかでも海軍火薬工業史については『高経大論集』に発表された諸論文をもとに、著書『日本海軍火薬工業史の研究』を2003年に日本経済評論社から上梓されました。280頁にわたる浩瀚なご研究で、私には不案内な方面ではありますが、学界では高い評価を得たご研究の成果と伝え聞きます。

小池先生は、その物静かで温厚な風貌のなかに、激しいものを秘めている方と拝察いたしております。いつもは寡黙でいらっしゃる会議の席上でも、道理に反する言には強く抗議されたお姿が目には浮かびます。先生は特任教授として、

今後も本学の学生教育にご尽力いただけることになっております。長くご健康で、残されたご研究課題に成果を上げられるよう祈念する次第です。

岸田孝弥教授は、1976年4月に専任講師として本学に赴任され、以来、助教授、教授として31年間の長きにあたり、本学をベースとして精力的に研究と教育に努めてこられました。

岸田先生のご専門は経営学、経営工学の全般にわたる幅広いものですが、とくに産業心理学と労働安全衛生が中心にあり、その分野では日本国内のみならず国際的にも活躍され、注目されるお仕事を残してこられました。いくつもの関連学会での中心メンバーとしてのご活躍、国や自治体の審議会委員の歴任は数えきれぬほどであります。

先生は、日本大学理工学部を卒業されてまもなく、大学院で学ぶかわら(財)労働科学研究所で単調労働や労働生理等の研究に携わった経歴をお持ちです。私は昔、いくらか労働疎外問題を勉強したとき、この研究所の単調労働調査研究を参考にさせてもらった経験がありました。岸田先生が若い研究者として、すでにこの分野で実績をあげられていたことを知って、改めて敬意の念を禁じ得ません。

先生は学生の教育にも、強い熱意をもってあたられ、これまで多くの人材を輩出してこられました。ことに2005年度には、現代GP事業「新地場産業の創出と参加型学生教育」が、文科省により本経済学部取組みとして採択されましたが、岸田先生はその企画・運営の中心を担って活躍されました。これは学部としてもたいへん感謝すべき事柄です。また岸田先生は大学・学部の管理運営にもご尽力されてきました。ことに2000年度から1期2年間務められた産業研究所所長としてのお仕事は、ご専門を生かし群馬県内諸企業と連携して進められ、本学の発展に大きく寄与されたと言えるでしょう。

岸田先生は、「直言実行」型の性格であり、教授会でも厳しいご発言で有名？でしたが、しかし「人を裁く」といった種類の言ではなく、あくまで「事に就く」発言であって、是非には厳しくとも後は爽やかでした。今回ご定年を迎え、退職なされることは誠に残念ではありますが、今後のご健康と変わらぬご活躍を願ってやみません。

小川雅敏先生は、東京足立区に出生され、1965年に横浜国立大学経済学部を卒業されました。先生は、当時の学生生活がのちの人間形成に決定的だったと語られています。私も同世代なので60年代の雰囲気と共に吸って育ちましたが、

当時は戦後民主主義の全盛期であり、経済学ではマルクス経済学が大きな影響力を持っていました。学生たちは少々無理に背伸びしながらも、時代の大課題に絡めて自分たちの生き方を語りあったものです。

小川先生は、大学卒業と同時に当時の経済企画庁に入りましたが、それは人間や世の中のあるべき姿を考え、その問題解決のためであったと述べられています。

先生は経済企画庁で主に経済白書編纂など国民生活の経済分析に携わってこられ、93年6月に国民生活局審議官をもって退官なさるまで28年余同庁にお勤めになりました。その間71年から73年まで経済企画庁から派遣されて、アメリカ合衆国ジョーンズ・ホプキンス大学大学院に学ばれ、修士の学位を授与されています。

小川先生が本学に赴任されたのは、比較的最近のことです。本学は経済学部を基礎とした既設の大学院経済・経営研究科修士課程の上に、2004年4月博士後期課程を開設しましたが、「マクロ経済学」分野の指導教授が手薄であったため、当時民間のMSK基礎研究所理事を務められていた小川先生に就任を請い、同年10月教授として赴任していただいた次第であります。

早や2年半の時間が過ぎ、小川先生も本学ご定年を迎えられます。先生はご経歴から想像されるような堅物のお役人タイプではなく、東京下町育ちの気さくな雰囲気を持たせ、だれとでも快活に談論を交わす方です。永遠の青年という印象の小川先生には、もっと長く我々教員とも学生ともおつきあい頂きたかったと残念ではありますが、非常勤講師として今後も学生教育に力を貸して頂けるので、それで満足すべきでしょう。本当に有り難うございました。

小池先生、岸田先生、小川先生、舌足らずではありますが、学部を代表して3人の先生に再度お礼の言葉を申し上げます。有り難うございました。お元気にお過ごしください。